

ヨハネによる福音書 4章43～54節

ヨハネによる福音書は、今月、中ほどの48節でこう記しています。「イエスは役人に、『あなたがたは、しるしや不思議な業を見なければ、決して信じない』と言われた」。つまり、イエスは不思議な業見たさに来る人々を信用されなかった、とヨハネは言うわけですが、ヨハネがこの種の記述をするのは実は、これが初めてではありません。ならば、なんでまたここで、ということになりますが、何らかの理由がなければ それこそ、なんともしつこい、となってしまうでしょう。

今月は、メッセージを聴き取るうえで 何やら重要なかぎが隠されていそうな このあたりの事柄を切り口にして、御一緒に聖書の学びを進めていけたらと思います。

「二日後」(43)

- ・今月の聖書は、「二日後」という書き出しから始まります。
- ・「二日後」というのは、サマリアの町のシカルで サマリアの女性や町の人々と過ごした、あの2日間(4:40)の後^{のち}ということです。(聖書地図「6. 新約時代のパレスチナ」参照)
- ・イエスは その二日^{のち}の後、目指していたガリラヤ地方に着き、再び、カナの町に向かわれます(43、46)。(聖書地図「同」参照)

出来事のあらまし

- ・カナでの出来事は、ひと言で言えば、次のようになります。
王の役人がいて、その息子が死にかかっている。
役人は、息子を癒やしてほしい、と イエスに願い出る。
イエスはその願いを聞いて、役人の息子を癒やす。
- ・大筋だけを言えば そのようになりますが、ヨハネがこの出来事を記した意図はどこにあるのでしょうか。
癒やしの物語として読むだけで、はたして十分なのか？ それとも、それ以上の何かがそこで語られているのか？

「イエスは自ら^{みづか}、『預言者は自分の故郷では敬われないものだ』と
はっきり言われたことがある」(44)

「ガリラヤにお着きになると、ガリラヤの人たちはイエスを歓迎した」(45)

- ・まずは、ヨハネが記すこれらの説明書きから見てみましょう。
- ・イエスはユダヤ地方のベツレヘムで生まれたものの、それは、両親(ヨセフとマリア)が住民登録のために赴いた旅先での出来事でした。彼らはそもそも、ガリラヤ地方のナザレという村で暮らし

ていました。実際、イエスもそこで育てられたわけで、ですから、ガリラヤがイエスの「自分の故郷」(44)でした。(聖書地図「6. 新約時代のパレスチナ」参照)

・故郷のそのガリラヤを指して、イエスは「預言者は自分の故郷では敬われないものだ」(44)と言われたのでした。

なのに、そのすぐ後で、そのガリラヤにお着きになると「ガリラヤの人々はイエスを歓迎した」(45)と、ヨハネはそう記すのです。

・いったい、どうなっているのでしょうか。

・これを理解するには、これらの背景としてある事柄を知る必要があります。

① 初めに、イエスが故郷のナザレに戻り、ユダヤ教の会堂で聖書を取り次がれたときのことです。イエスは言われました。「あなた方は、『他の所でしたしるしをここでも見せてくれ』と言うにちがいない。しかし、しるしはここでは示されない」。すると、人々は憤って、イエスを皆で町の外へ追い出し、崖から突き落とそうとします。こうして、マタイは最後に、次のように記すのでした。「人々が不信仰だったので、そこではあまり奇跡をなさらなかった」(マタイ 13:58)。これが、44 節の言葉の背後にある事件です。(マタイ 13:53~58、マルコ 6:1~6、ルカ 4:14~30)

② そのガリラヤの人たちが どうしたことか、今また、イエスを歓迎している。けれども、それは、「彼らも祭りに行ったので、そのときエルサレムでイエスがなされたことをすべて、見ていたからである」(45)と、ヨハネはその理由を的確に書き添えています。つまり、イエスがエルサレムで行なった いわゆる奇跡的なことを、彼らはそこで目にしていたからだ、と。

③ 要するに、イエスはかつて 故郷で、しるしを求める人々の不信仰を御覧になった。が、エルサレムで不思議な業を見た そのガリラヤの人々は 今また、奇跡的な業を見せてもらおうと、イエスを再び歓迎している。そう、ヨハネは語っているわけです。

・しかし・・・

「イエスは役人に、

『あなたがたは、しるしや不思議な業を見なければ、決して信じない』

と言われた」(48)

・言い換えれば、不思議な業 見たさに来る人々を イエスは信用されなかった、ということですが、冒頭で申し上げたとおり、この種のことを ヨハネ福音書は一度ならず 記しています(例:2:23~25)。それをここでも、というわけですから、そこには何らかの理由があるはずですが、

・それは、推察するところ、以下のような時代状況から来ていると考えられます。すなわち、

① ヨハネの福音書がまとめられたのは、紀元の 90 年から 100 年ごろ。イエスが世を去られて すでに、六、七十年が経っていました。

② しかも、ユダヤの地にあった教会は政治的・宗教的国難にみまわれ、教会の人々は国内外の各地に散り散りになっていました。そうした状況のもと、その散らされた各地に新たな教会が建設されていったのですが、

③ となると、イエスの教えはあやふやになり、自分たちに都合のいいように歪められていきます。

④ そんななか、奇跡的な業を きんかぎよくじょう 金科玉条、信仰に欠くべからざる 何より重要なものと言う人たちが出てきたものと思われます。不思議な業を わざ めぐる問題です。

⑤ ですから、これを取り上げ、イエスが教えられた本来の信仰のあり方をいま一度、確認する必要があったということです。

・だとしたら、ここで問題にされているのはどんなことで、それはなぜなのでしょう。

「カファルナウムに王の役人がいて・・・」(46)

「イエスのもとに行き、

カファルナウムまで下って来て 息子をいやしてくださるように頼んだ」(47)

役人：「主よ、子供が死なないうちに、おいでください」(49)

イエス：「帰りなさい。あなたの息子は生きる」(50)

「その人は、イエスの言われた言葉を信じて 帰って行った」(50)

・役人の息子の癒やしはこうしたなかで起こされたのですが、王の役人は「カファルナウム」に住んでいました(46)。イエスのおられるカナから35キロほど離れた、同じガリラヤの町です。(聖書地図「6. 新約時代のパレスチナ」参照)

・その息子が熱を出して(52)、死にかかっています。役人は、イエスが以前、カナで水をブドウ酒に変えられた(ヨハネ2:1~11)のを聞いて知っていたのでしょうか(46)。急いで馬車を出し、イエスのもとに向かいます。そして、カナに着いてイエスを見つけると、必死な思いで願い出る。

「カファルナウムまでいらしてください。息子が死にそうなのです。癒やしてください」(47)

・ところが、そんな役人に返されたイエスの言葉はただ、「帰りなさい。あなたの息子は生きる」(50)とだけです。イエスは、そこを動こうとされません。

・けれども、役人はその言葉に従い、その「言葉を信じて 帰って行った」(50)というのです。

・それは決して容易なことではなかったのではないのでしょうか。第一に「あなたがたは、しるしや不思議な業を見なければ、決して信じない」(48)と言われ、加えて「帰りなさい。あなたの息子は生きる」(50)です。私たちがこんなふうに言われたら、はたしてどう思うのでしょうか。

・しかし、そんななか、王の役人が気づかされたことがあったとしたら、それはいったい何だったのか。そして、そのことを通して、ヨハネの福音書は私たちに何を伝えようとしているのか。イエスの思いに心を寄せつつ考えてみたいと思います。

・さらに、「あなたの息子は生きる」との言葉ですが、ギリシア語の原文(ζῆν < ζῶν)そのままの訳です。ちなみに、いわゆる岩波訳はこれを「あなたの息子は生きています」と訳出して、原語のギリシア語(現在形)の含意をより明確に表現しています。ある種「宣言」とも響くような言い方ではないのでしょうか。このような言葉の裏になにがしかのメッセージが置かれているとしたら、それはいったいどんなものなのでしょう。

「きのうの午後一時に 熱が下がりました」(52)

- ・こうして 役人の息子は癒やされるのですが(51)、その時刻について、ヨハネは(役人の僕^{しもべ}たちの言葉として)、それは「きのうの午後一時」だったと記しています。
- ・イエスが「あなたの息子は生きる」(50)と言われた その時間ですが(53)、一つだけ説明を加えるなら、ここで「きのうの午後一時」と言われているのは、ユダヤの時刻の数え方からきています。息子の危急の時です。役人は、カナに宿泊したわけではありません。
- ・当時のユダヤでは、通常、一日を「日の入り」から数える仕方が採られていました。
- ・したがって、日が沈んでから家に帰り着いた この役人の場合、日の入り前の 昼間の 1 時は「きのうの午後一時」となるわけです。

気にかかるひと言

- ・ちなみに、気にかかるひと言があります。53 節の最後のひと言で、「彼もその家族もこぞって信じた」とある記述です。
- ・というのも、彼 すなわち王の役人は息子の癒やしをイエスに願い出たとき、「イエスの言われた言葉を信じて帰って行った」(50) からです。そして、息子は癒やされた。
- ・なのに、事が成った後、53 節で今また もう一度、「彼も・・・信じた」と記されているのです。
- ・息子の癒やしはすでに終わっているのですから、それが済んだ後で それをまた信じるというのは、どう考えても 筋が通りません。
- ・ここには何事か、重要な真理が隠されているように思われてなりません。それは いったい、何なのでしょう？

さらには・・・

- ・さらには、次の 2 点も、今月の箇所を読み解く参考になるかもしれません。
1. サマリアの町での出来事 (4:1~42)
 - ・サマリアの女性とシカルの人々が信仰の告白へと導かれます。そのとき、その信仰を引き起こしたのは何だったのでしょうか。
 - ・ヨハネはこれに続けて、(不思議な業^{わざ}を見ないと信じない) 故郷の人々についての解説を挿入し、
 - ・そして その後で、これまで見てきた王の役人の信仰を記しています。
 - ・解説を間に挟み込むようにして構成した、ヨハネのこの書き方。そこには何か、そのようにした意図があるのでしょうか。
 2. 力の人だった王の役人
 - ・役人は王の権力に仕え、その権力のもとで事を行なう 力の人でした。
 - ・その役人が息子の危急を前にし、必死の思いで、イエスに助けを頼み求めています。
 - ・ここにも、聴き取るべき何らかのメッセージが置かれているのかもしれない。